9 選択肢になかった福祉への道

常陸（ひたち） 実（社会福祉法人ひまわり福祉会理事長）

福祉とは無縁、バンド活動とマネージャー ……◆

高校卒業直前に「将来どうしよう」とすこし悩みましたが、とりあえず退屈な田舎暮らしから逃避しようと、島根県出雲からあてもなく憧れの大東京に行くことにしました。今思えば、この向こう見ずな考えとその後の一〇年が、遠回りの人生のはじまりだったと回顧（かいこ）します。

大学も福祉とは無縁の学部に入学。入ってみればバンド活動とアルバイトに明け暮れる日々。卒業後もさしたる希望する職業もなく、フルバンドのマネージャーに就くなど、安息の地を求める旅をさまよっていました。そのような東京砂漠で漫然と暮らしていたときに、オアシスとなるような女性にめぐり会い、即行で結婚することを決めました。

その後の仕事先にもなんのこだわりもなく、彼女の実家の家業を手伝うことで、両親に結婚の承諾を得ていました。そんなある日、私の父親が彼女の実家を訪れ、急に、私が実家のあとを継ぐ話や、仕事先も近く完成する特別養護老人ホームで働くような話を、一杯呑みながら話し出したのです。彼女の両親にとっては寝耳に水の話だったと思いますが、その場はなんとか取り繕（つくろ）い、数か月が過ぎました。

この間、彼女から両親への説得により、渋々と嫁に出すことを承服されました。新婚生活や出雲へのUターン、あまり興味がない業界への就職など、なにからなにまでめまぐるしい変化でしたが、こうして遠回りの人生に終止符を打ち、新たな道を踏み出すことになりました。

脱・寝たきりの実践から福祉のツボに ……◆

ひまわり園に入職する前に数か所の特養を見学に行きましたが、いずれの特養でも「寝たきり老人製造所」のイメージが脳裏に焼きつき、ひまわり園でも、あまり気乗りのしない仕事にとまどいがありました。部署は訓練指導員というなんでも屋で、朝礼後は全館の廊下掃除をしながら入居者との会話や介助、その後は入居者をホールに集めて機能訓練、昼食介助、入浴や排泄等の援助技術を覚えることで必死でした。しかし、当分の間は「福祉の仕事で悔いはないか?」など自問自答の日がつづきました。

ひまわり園では開設当初から「脱・寝たきり老人製造所」をめざす方針が掲げられ、ほかの特養から移籍してきた生活指導員が当時の特養を反面教師にして、全員離床やオムツ外しの徹底、生活の場への転換など、逆転の発想での援助実践が展開されました。その結果、寝たきりで入所されたお年寄りが、徐々にADL（日常生活動作）が改善され、無表情だった顔がいきいきとした笑顔に生まれ変わるなど、今まで味わったことのない仕事の達成感に浸ることができました。

そして、「老人問題研究会」や「呆け老人家族の会」の活動に結成当時から関わり、「21世紀・老人福祉の向上をめざす施設連絡会」の前身である「老人福祉のあり方を考える懇話会」にも結成時から関わり、このようなすばらしい福祉の仲間に出会えるようになってから、福祉のツボにはまりました。

すべての経験と出会いが今の糧に ……◆

遠回りの一〇年はムダ? と聞かれれば、バンドマネージャーをしていたころに、メッキがはがれただれかのフレーズ「人の話をよく聞くこと」というソーシャルワークの基本が身についたことです。

当時、バンド業界ではレギュラー入りをめざす「ボーヤ」という雑用係がいて、彼らの存在や生活は悲惨そのものでした。バンドマンに憧れてバンドリーダーの門を叩き、小遣い銭程度で働かされ、見込みがないとほかされる現実をたくさん見てきました。

お人よしマネージャーは彼らの憂さ晴らしの標的となり、ときどき安酒を奢らされ朝まで付き合い、そのときに「傾聴」と「共感的理解」を体得。そして、砂漠でオアシスとの出会いが、私の人生の糧になっていることは間違いないようです。